



題林愚抄

冬郭上

初冬

山亦初冬

時氣初曉

羽時雨

圓時雨

望時雨

獨時雨

嘉時雨

月時雨

深時雨

月時雨

深時雨

月時雨

深時雨

月時雨

深時雨

月時雨

深時雨

月時雨

初冬

初冬

時氣

初冬

時氣

松林

風氣

心開文庫

卷之二

目錄二

夕星  
晝星  
宿度  
江星  
星宿  
星宿  
冬星

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

晝經星  
宿系  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

晝經星  
宿系  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

晝經星  
宿系  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

晝經星  
宿系  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

晝經星  
宿系  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

晝經星  
宿系  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

晝經星  
宿系  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

冬節下

冬節

晝經星  
宿系  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿

星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿  
星宿









里御氣

日

風

鳥

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

金

木

水

火

土

四

三





卷之三

卷之三

三

郭は撰 素うの画も書まくのをめざすと考へて此が  
曰 本居宣長の筆であると考へたのである。廢帝の事  
曰 ほんとうに本居の別号は「廢帝」であつて、あら  
續古 きこといふ事は、ともに中國のものであつて、ひつて  
曰 ちりとも考証されがちの事である。如前所  
曰 あらわしの例で、さういふのよろあれと考へておき  
曰 はるかに考へたのである。よつて、経文  
郭は撰 素うの画も書まくのをめざすと考へて此が  
曰 本居宣長の筆であると考へたのである。廢帝の事  
曰 ほんとうに本居の別号は「廢帝」であつて、あら  
續古 きこといふ事は、ともに中國のものであつて、ひつて  
曰 ちりとも考証されがちの事である。如前所  
曰 あらわしの例で、さういふのよろあれと考へておき  
曰 はるかに考へたのである。よつて、経文

月照的窗  
瘦的葉  
空的子

母傳を等

家集

信教部下

洞を二下

白角

至る方を親

巣立の事

巣山石

信教部下

暮立の事

同

信教部下

冬の月

月の風の音が聞こえて月の夜が静かに月乃は

月の音が聞こえて月の夜が静かに月乃は

入江の處

月の音が聞こえて月の夜が静かに月乃は

水桶の底

月の音が聞こえて月の夜が静かに月乃は

波瀬の裏

月の音が聞こえて月の夜が静かに月乃は

あらわな

月の音が聞こえて月の夜が静かに月乃は

衛安の後

月の音が聞こえて月の夜が静かに月乃は

おまほ

月の音が聞こえて月の夜が静かに月乃は

御安の後

月の音が聞こえて月の夜が静かに月乃は

おまほ

題林鳥抄

冬於中

冬

千

同

猿

猿

新千

文保

猿

新拾

同

猿

新拾

同

猿

新拾

同

猿

峰

冬

冬於中

冬

千

同

猿

猿

新千

文保

猿

新拾

同

猿

新拾

同

猿

新拾

同

猿

峰

高木の道

基俊

峰

峰

峰

峰

峰

峰

峰

峰

峰

峰

峰

峰

峰

峰

月  
新羅

八月二日  
有日也

燒衣

新羅

有日也

樵器霜

新羅

有日也

聖使

新羅

有日也

橋上霜

新羅

有日也

多山霜

新羅

有日也

高麗霜

新羅

有日也

燒衣

新羅

有日也









文  
鵠

卷之四

三

七

藤原

源氏物語

朝拾

三四七

後子

大然後

藤原

後成

藤原

赤澤

藤原

後光

藤原

赤坂

卷之三

卷之三

卷之三

深秋十月 同  
陳子亮 鄭裕  
郭裕

高麗公國下  
多金渡  
延祐之庭  
元仲和歌辭



にあきる

五

五  
本  
名  
目

船と水を

綱代

新拾

金

萬川屋

百元

日

終手

鳥居

月

金

千

金拾

金

月

船と水を

綱代

新拾

金

萬川屋

百元

日

終手

鳥居

月

金

千

金拾

金

月

金拾

金

新拾

佐風法師

月

経書佛則法

新拾

金

新古

源空世

新拾

三和家

新古

入日御

新拾

新拾

新古

新拾

卷之三

卷之十

卷之三

三

八



४८

卷之三

卷之三

卷之二

この事より秋のをえよとやかとの言ひやうと見えまつたが、暮冬に連れて  
立あきや船八人をもつて山里にて泊り、夜  
轟鳴の音の如く、船の音もれも轟きたり故の名とも云ひ、夜雪へ薄暮  
とぞ、此の音も雪はせれたり船八人ともさしかかり、岸側へ連移  
といふは、必ず八ト九時からとらへて、船の音もあり、  
かう雪ゆきの音も、船の音わざ様もそのうち聞えり、後夜船

山里のうきよひのくのへひくよ御みさりうせ おの御用い  
経もくあを西京めぐらしてうづくらちまどひのりは 任事の實産

もとよりて今を二つともう山事あつて財のうへとんでもなれ  
長三位都政  
源氏物語  
御殿法師

おのれはかくへんをうながす。やハ、ぬる源流

おとらわむと見ゆてあひをひきりまつるやう人等  
着物あらそ

ソシスのとてでもせぬ事多<sup>シ</sup>。ナニシテリト御月を  
御面に見付

のうそか三日の計校今更に此をあきらめし  
事はござりまへども、お詫び申候る事無  
度の事よりえん人とはあらねどとがく事  
を察りまへん。　辨事一法師

あかくはるに  
あかくはるに  
あかくはるに  
あかくはるに

えく處のやうくもきのほりまんぢうてんぢくにあらぬゆふ  
おきす家野  
ひとすうちよき人乃ちてんぢくはれもものかくさのひと  
中納之為處

えうのをうち海ひぬくと風のふたをかへすまうに  
渡過をまつて

月をきのむらうやまとほんぢりえうとの乃ねの玉みゆら  
西三條舞

後漢書卷之二十一

四  
七

卷之三

同上





書かれて風  
高々とれどもこの風の如くよりはるれどもひやけます故も此處  
山中を渡る  
誰若 ひまわりの花の如きに一ひとてへるより、まきり、松岡は山  
風 まほらとれめぐるのものとてうとうとすをゆる。永福つて  
わざ若 えんじゆくへまくらむとてうとうとすをゆる。あるとて下  
月 タマレハ風よりうとうとすをゆる。まきせのひよもまくらす。風倉を下  
山中を渡る おはれ うとうとすをゆる。まきせのひよもまくらす。風倉を下  
月 わくわくて年がうは代のもす。やねすとゆゆむ候也。圓文  
山中を渡る 残雪 またたかはるひとあうたれをまのくはくとてのゆゑと  
餘詠 詞詠 タマレハとそその山の聲のうよまた乃とまのくはくとてのゆゑと  
山中を渡る 德言 かくかくとまくらまくらとそその山の聲のうよまた乃と  
山中を渡る おはれ ほくとまくらまくらとそその山の聲のうよまた乃と  
山中を渡る 風 あはれ まくらまくらとそその山の聲のうよまた乃と  
山中を渡る 同 あはれ まくらまくらとそその山の聲のうよまた乃と  
山中を渡る 星 あはれ まくらまくらとそその山の聲のうよまた乃と  
山中を渡る 月 あはれ まくらまくらとそその山の聲のうよまた乃と

池を當

子

ぬき雪

新拾

浦雪

風

も聲

月

痛雪恨版

月

今海雪

月

浦雪恨版

月

久海雪

月

傳音書

月

新聲

月

海毛聲

日

海毛聲

新聲

浦毛雪

日

桂序雪

正

桂序聲

新千

弘ノ雪

日

也

新聲

里雪

新千

山雪

新古

新聲

日

新聲

日

新聲

日

風

雨

暴風

山あ雪ね

雪

千

後古

後後

後後

まく

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

夜雪

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

あわ雪

新宿

老健者

新宿

法華經

新宿

四

椎葉  
新葉  
月日  
金

卷之二

月考卷

卷之三

年譜

巴蜀同携于子豹金匱

卷之三

卷之三

同書日月日月平日勿凡凡正金設搭繡被

卷之三

卷之三

郭勑

やうのまことにあらわす

年鑑

卷之三

卷之三

日 ·

が、さういふ事は、一もあらま。人ひかへて、朝鮮の年とせんじ  
くわざひをうこぐ。一方のうよきうちきう年のうきが

卷之三

四

コロナリセキヨハシトシタクアラヌ年ニテハラスニシテモモロコシ  
カニシテモモロコシテモモロコシテモモロコシテモモロコシテモモロ

卷之三

四

とまくてもあわうべしとがうされはとがうとまよがふううう  
うううううううううううううううううううううううううううう

卷之三

かくもう、はるかにうらやましく思ふ。しかし、この年は、じつと見え

卷之三

（略）

卷之三

ପ୍ରକାଶ

五之日，有孚惠心，勿

約略的書評

四

月日之久亦不以爲苦也。而今則不然。蓋人情有所不能忍者。則事有不可解者。故曰。吾子之無歸也。豈其然乎。

卷之三

おもひあつた間をうへておまかせをすまへ  
まへてからこちのよきとくをひきとくへや  
おもひあつたあはれのとくへゆきとくへや

卷之三



徐  
叔

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

卷之三

